

府中市立博物館開館によせて

渡 辺 真紀子

「府中市立博物館」が62年4月4日にオープンする。これまで20年間運営されてきた府中市立郷土館（府中市宮町）を母体に、場所を多摩川沖積低地の府中市南町に移し、昭和54年から新たな博物館作りが始まった。全敷地面積12.3ha、用地を除く総経費が約67億円という本博物館の規模は、昨今の博物館建設ブームの中でも、市政レベルとしては大きいものといえる。運営は、第3セクター方式による府中市郷土の森事業団と府中市教育委員会との共同によるもので、歴史、考古、民族、自然、教育普及の5部門に2名ずつ計10名の学芸員が配属されている。

施設は、直径23m平面ドームのプラネタリウムを保有する本館（6,900㎡）のほか、敷地内に各種の野外復元建築物がある。旧甲州街道沿いに建つ明治期の典型商家や、捌上（養蚕）農家と捌下（水田）農家、大正期の旧府中町役場など5棟の復元建築物においても内部展示が企画されている。また、敷地内を東西に横切る旧自然堤防を利用して、台地と低地で特徴づけられる府中市の地形の縮図を造り出した地理学習園は、将来的に自然学習棟の建設が予定され、地学系と生物系の両分野による多摩川の自然史の調査基点になることが期待されている。

本館2階の常設展示室は、府中のおいたちをまず第四紀更新世前期（約100万年前）の海の時代で幕あけし、丘陵、段丘形式の時代を経て土の中に秘められた縄文文化から国府の時代へと続き、そして宿場町府中の繁栄をみた近世から近代・現代へと順路を進めている。8つのコーナーで構成される展示室の最後に府中市の動物と植物の生態の紹介を行い、見学者の目が自然と野外へ導かれるように配慮されている。

展示品は全体的に低い位置に置かれており、貴重な文化財もガラスケースに入れず直接手に触れることができる。パネルの解説にも独自の見解をとり入れており、関係者の積極性が感じられる。展示物はいずれもデザインに工夫がなされ、芸術的な作品が並ぶ。中でも、柱を巻くようにして天井までとどく3本のモノリス標本は目を引く。モノリスは、地質断面に合成樹脂を塗布し、薄く層状に硬化させたのちに剥ぎ取って断面を転写したものである。下から順に、貝化石が混入する上総層群連光寺層（泥層）、古相模川の河床面である御殿峠礫層と多摩ローム層、立川礫層と立川ローム層そして表土黒土層に到る全長15mのモノリス標本はみごとである。

ところで、段丘形成時代に関連する展示物の中に、府中市天神町でサンプリングされた火山灰層の一次鉱物薄片プレパラート標本が3台の偏光顕微鏡とともに設置されている。標本の作成は、かねてから鉱物の“無機の世界”に魅せられている私が喜んで引き受けたものであるが、腐植で汚染された黒土層も、有機物を分解すると赤褐色に変わり、さらに脱鉄処理をすると灰色の粒子がよみがえる。こうした粒子を薄片にして偏光顕微鏡の十字ニコル下でのぞくと、カンラン石はメキシコオパールよりも鮮やかな、磁鉄鉱はダイヤのような輝きをみせる。

博物館の別称、郷土の森の園内には、60種、2,000本の梅園が広がり、1月上旬から3月下旬まで花見を楽しむことができる。多数のご来館を、関係者に代わって待ち望みたい。

（交通：京王線分倍河原駅より健康センター行きバス10分、郷土の森下車）

自然現象の予測さまざま

川 崎 逸 郎

ある学会のはなし、崖くずれの調査を行った発表者がその要因として、岩盤強度試験、土質試験、X線回

析……等のデータを示し「いずれも発生を予測させるものであった」という話をした。そこで「それならば崖

くずれば、地形や地質からみてそれぞれのデータが全く同じであるところすべてに起こるはずなのになぜ部分的にしか発生しなかったのか」という意味の質問があった。しかし、期待した答えは返って来なかった。

話はわかるが、戦後、気象予報が当たらないのは計算機がないから……ということでは気象庁に東洋一の計算機が入った。しかし予報の結果は変らなかつた。それで富士山レーダーがあれば……ということでは富士山頂に東洋一のレーダーが据付けられ広範囲の情報が入手できるようになった。予報はそれまでと大差はなかつた。次に気象衛星があれば……ということになった。その結果は御承知の「台風は予想外の進路をたどり……」。

昭和61年11月に大島の三原山が噴火し、日本列島が注目した。次々と発表される噴火予知の結果は、島民の期待に沿わず国民を落胆させることになった。日本で最も火山観測機器の揃っている三原山の話である。それで噴火予知が充分できないのは測定機器が不足しているから……ということでは多額の予算がついて新しい機器が設置された。補充された機器が動きはじめた昭和62年1月、割れ目噴火の可能性ありとの警報が出され、島民の危機感をあおった。しかし、警報は二週間経たないうちに解除された。

以上が現代自然科学の最先端の状態である。心寒いものがある。その共通とするところは、自然現象の観察が不十分であるということに盡きよう。科学者が自然現象に対する認識の問題がここに現われている。崖くずれば地域によって「繰返し特性」があり、この性格には過去から現在に至る「地形の生い立ち」をつくった地域の習性が潜んでいるのである。これを悟……というらないと崖くずれの予測は難しい。したがって絶えず造型的な立場からの観察が必要となってくる。

気象予報にも同じことがいえる。第2次大戦中、気象将校として作戦に参加した経験では、人間が「命をかけ

た予報」の確率は大きかったということである。「明朝の時を期して〇〇に爆撃を敢行せんとす。気象班長の判断如何……」と参謀から問われたとき、現在の予報状態では当面の急務に間に合わない。気象機器のデータに頼りきって、充分な観天望気（航空機からの観測を含む）の裏付けのない予報は意味がないのである。

とくに火山では、「生態学」的観察が重要となる。地球上それぞれの地域にある火山活動は、その地域を特徴づけるような活動を行っている。三原山には三原山の「火山生態学」——このような専門語はまだ生れていない——があるはず、文献の中の火山常識のみで、眼前に起こっている火山現象を判断しようとする態度は科学的とはいえない。ぼう大な文献を抱えていては知識は常に文献の後追いとなることもあり得る。

噴火口に近づき熱い岩片や火山灰や熱風を受けながら観察することもせず、デスクワーク中心の学者に噴火予知ができるはずがない……と考える学者も大勢いる。アルン・タジェフの真似をしるとはいわぬがせめて行動力だけでも……。

自然現象の予知、予測は難しいことに違いない。いかに精密機器であろうと大自然の前には蟻螂の斧である。測定器の針の動きやデジタル表示は人間の頭の程度を現わしているのもあって、自然の動きをすべて伝えるものではないのである。測定機類のデータは常に実際の現象と照合しエラーをチェックする。そして測定器の習性をよく知っておくことが肝要であることに無関心な人が多い。

絶えざる観察こそが自然の生態を知り得る最良の方法であることを忘れてはいまいか。「観察の裏付けのない定量的表現は無意味である」という自然科学の大原則を忘れてはいまいか。それ故、私の担当する学科では野外実習により厳しい観察を課している。

(千葉大学)

ユートピア

西川 治

税制改革とやらで、マル優がどうなるか、年金生活者の一人として気になるころだが、「もし優がとれなければ不可にして下さい」との注文をつけた答案用紙が現れると、やはり面白くなかった。

まさか成績を気にする人がその語原ではあるまい

に、優という字を分解すれば、なるほど人が憂えるともよめる。夕ぐれの窓辺でひとり静かに憂いにふける乙女の姿には優にやさしい風情もあるが、ろくな回答もできないくせに、優を暗にねだるような人でなしには、ただ●とでもつけたいと思った。それでは教務あたり